

安全管理マニュアル

1. 事故発生の原因と対策

自然体験活動を行う際に主催者が特に注意しなければならないことは、参加者の安全確保です。事故の原因となる危険には、事前に予測できるものと突発的で予測不可能なものがありますが、危険を察知する能力は参加者の年齢・経験によって異なります。予測できるものについては可能な限り事前に対策しておくことが、事故防止につながります。

(1) 事故の原因

事故の原因は、天候や生物などの環境によるものと、参加者・主催者の人的行為によるものの二つに大別されます。

①環境によるもの

- ・天候（大雨、台風、雷、猛暑、吹雪など）
- ・災害（地震、火事、がけ崩れ、増水、津波など）
- ・植物（かぶれ、とげ、花粉アレルギーなど）
- ・動物（クマ、サル、イノシシ、マムシなど）
- ・虫類（ハチ、毛虫、ダニ、ヒル、ツツガムシなど）

②人的行為によるもの

- ・安全に対する認識不足
- ・危険に対する感受性不足
- ・服装の不備
- ・持ち物・装備不足
- ・対応能力不足
- ・教育、指導力不足

(2) 事故防止対策

上記の原因を事前に取り除き、事故を防止するための対策は以下の通りです。

①安全教育

- ・参加者への周知徹底
- ・主催者側スタッフのトレーニング(危険予知、救急法の習得など)

②安全管理

- ・危険の排除(ウルシを伐る、ハチの巣を取り除くなど)
- ・ハード面の整備(道の補修など)

③安全対策

- ・危険箇所・時間帯の洗い出し、行動方針の検討
- ・事故発生時の対応(応急処置、医療機関への連絡など)

2. 事故を防ぐための事前の準備

(1) 計画時の留意点

まず活動の目的、対象者を明確にしましょう。公園などの広いフィールドの中では、目的によって適切な場所が異なります。対象者の年齢や属性によって危険の度合いも違いますので、これらの点を考慮して活動場所を選定するようにします。

(2) 下見の実施

初めてのフィールドではもちろん、使い慣れた場所であっても活動日の一週間ほど前を目安に（あまり前過ぎると、フィールドの様子が変化している可能性があります）必ず下見を行います。その際確認するポイントは以下の通りです。

交通機関・道路事情:推奨する電車やバスの発着時刻、時間帯による道路の混雑状況など

集合場所:日差しは強すぎないか、挨拶・説明ができるスペースがあるか、携帯電話は受信可能か

集合場所から活動場所までのルート:道路の横断、足元の悪いところなどがないか

活動場所:休憩が可能なスペースや日陰はあるか、危険な動植物の痕跡はないか、崩れそうな斜面や倒れそうな樹木はないか、携帯電話は使用可能か

避難場所:参加者全員が安全に避難できる場所があるか、分散させる場合はどのようにするか

トイレ・水場:場所、形状(子どもが嫌がるケースもある)、水は飲用可能か

救急医療機関:場所・名称・電話番号・活動場所からのルート

(3) 事前の健康調査

参加者の健康状態を事前に確認しておきます。植物に触れることが多くなりますので、アレルギーの有無については特に詳しく聞いておきましょう。また、新型コロナウイルスの感染が拡大しています。日常的に体温や体調をチェックし、異常を感じた場合には参加を見合わせるよう伝えましょう。

(4) 事故発生時の対応準備

① スタッフの役割分担

病院や保護者への連絡、病院までの交通手段の手配等を行う連絡係と、けが人・病人を安全な場所に運び応急処置を行う手当係をあらかじめ決めておきます。

② 緊急時の連絡網作成

巻末の様式を参考に緊急連絡網を作成し、スタッフ全員で共有します。

(5) 救急セット

軽いけがや病院に搬送するまでの応急処置に必要な物をそろえてひとまとめにした救急セットを用意しておきましょう。広いエリアで班ごとに分かれて活動する場合は、小分けにして各班のリーダーが持ち、軽微な擦り傷・切り傷に対処できるようにします。

なお、内服薬は用意してもよいですが、医師の許可、大人の方は本人の同意を得てから服用させるようにしてください。

【救急セットに入れるものの例】

- ・絆創膏
- ・脱脂綿
- ・包帯
- ・三角巾
- ・ガーゼ
- ・体温計
- ・冷却スプレー
- ・毛抜き
- ・爪切り
- ・消毒液
- ・抗ヒスタミン薬・ポイズンリムーバー
- ・水（傷口を洗い流すため。ペットボトルに入れておく）

※このほか、活動内容やフィールドの特性を考慮し、必要なものを用意してください。

3. 当日の活動中に注意すること

(1) 活動を始める前に

下見の際に確認した危険箇所、事前にその危険が取り除けなかった場所については、活動を始める前に参加者に注意を促すとともに、その場でとるべき行動を具体的に指示します。

また、特に幼児には言葉による説明だけでは危険なことが十分に伝わりません。シンプルなフレーズを繰り返し口に出させたり、動物をまねて動きを実演してみせたりするなど、工夫が必要です（参考：「ぼうさいダック」）。一方小学生以上の参加者に対しては、想定される危険について伝えただけで、どのような安全対策をとるか自分で考えさせることも、教育としての体験活動を行ううえでは大切です。

(2) 参加者の状態把握

活動中の参加者の様子には常に目を配り、疲れていたり顔色がよくなかったりする参加者がいたら、無理せず休むよう声がけをします。また、特に熱中症が想定される時期には休憩・水分補給をこまめに行うよう心掛けましょう（20～30分に1回が目安です）。

(3) スタッフの配置

スタッフの人数にもよりますが、特に事故の危険が高いと思われる箇所がある場合にはそこに重点的に配置し、参加者への注意喚起やサポートにあたるようにします。

4. 事故が起きてしまったら

生じうるあらゆる危険を想定し、対策を施していても事故が起こることはあります。まず

は冷静になり、事前の役割分担に従って対処していきます。

(1) 二次災害の防止

事故発生時の周囲の状況を確認し、二次災害を防ぐ措置を取ります。他の参加者を安全な場所に誘導し、落ち着かせます。

(2) けが人・病人の移動・応急処置

けが人・病人の安全を確保し、ショックを与えないよう注意しながら安全な場所に移動します。けがの場合は損傷部位を確認し、応急処置を行います。主な事故・けが・病気への処置法を紹介します。

①熱中症

【症状】

- ・顔が赤くなる
- ・汗が出ない
- ・呼吸が速く浅くなる
- ・体温が上昇する
- ・頭痛、めまい、あくび
- ・四肢の運動麻痺

【処置法】 ※症状の早期発見が重要

- ・風通しがよく、暑くない場所に運び衣服を緩める。
- ・水平、または上半身を高くして寝かせ、安静にする。
- ・意識があり、吐き気や嘔吐がなければ、様子を見ながらスポーツドリンクなどで水分を補給させる。
- ・体温が高いときは、額、首・わきの下・足の付け根の動脈を冷やす。

②擦り傷

- ・傷口を水で洗い流し、異物を取り除く。
- ・清潔なガーゼ・ハンカチなどを直接傷口に当て、手のひらで圧迫して止血する。
- ・消毒液で消毒し、絆創膏を貼る。

③切り傷・刺し傷

- ・軽い場合は傷口を洗って消毒し、ガーゼ・ハンカチを当てて止血する。
- ・出血箇所が腕や足の場合はその部分を高く上げ、ガーゼ・ハンカチで傷口を直接強く押さえる。出血が抑えられない場合は、傷口より心臓に近い動脈を手や指で圧迫する。
- ・大きなものが刺さった場合は無理に抜かず、動かないように固定して病院へ搬送する。

④ハチに刺された

- ・針が残っていたら毛抜き等で取り除き、患部を水で冷やしながらかよく洗う（ハチの毒は水溶性なので薄められる）。
- ・患部を指でつまむ、またはボイゾンリムーバーで毒を絞りだす。口では吸わないこと。

- ・抗ヒスタミン薬を塗り、早急に医師の診察を受ける。
- ・様子を観察し、アレルギーによるショック症状が出たらすぐに病院に搬送する。

⑤毒蛇にかまれた

- ・かまれた箇所を心臓より低い場所に保ち、寝かせて安静にする。
- ・傷口を洗い、毒を吸い出す。
- ・早急に医師の診察を受ける。吐き気、腹痛、脱力感、頭痛、皮下出血、視覚障害などがあらわれた場合は救急搬送する。

⑥打撲・捻挫

- ・関節の痛みと腫れが出た場合、関節を固定して動かないようにする。
- ・応急処置の方法は”RICE”と覚える (Rest…動かさず安静にする、Icing…冷やす、Compression…包帯・テープ等で圧迫する、Elevation…患部を心臓より高くする)。

⑦骨折

- ・患部の腫れ・変形、皮膚の変色、触れたときに激しい痛みがあるなど、骨折が疑われる症状が出た場合は、傘・板・雑誌など身近にあるものを添え木にして当てる。
- ・骨折部を動かないようにしっかりと支え、添え木と皮膚の間にタオルなど柔らかい布を十分に入れる。添え木を当てたら、骨折部が動かないように上下から包帯・三角巾で固定する。
- ・骨折部が変形している場合は、むやみに戻さずそのまま固定する。できるだけ早く整形外科・外科を受診する。

(3) 事故の連絡

救急車が必要と判断した場合は、早急に 119 番通報します。その他の場合は応急処置を行ったうえで緊急連絡網を使い医療機関・保護者に連絡します。事故が起きた時の状況、けが人・病人の容態など、要点を抑えて簡潔に説明・報告するように心がけましょう。

(4) 事後の対応

保険の手続きなどで必要となりますので、事故発生の時刻や現場の様子、けが人・病人の症状等写真を含めて可能な限り記録しておくようにしましょう。再発防止のためのスタッフトレーニングにも役立ちます。

またけがや病気をした参加者には、活動後もこまめに連絡をして回復具合を尋ねるなど、心のこもったケアを心掛けてください。

【様式】 緊急連絡網

事故発生

↓

けが人・病人の救護・手当て 担当：

↓

緊急連絡 担当： → 救急車 119 番
休日診療所：（名称・電話番号）

↓

保護者への連絡 担当：

↓

医療機関に搬送 担当： → 休日診療所：（名称・電話番号）
外科：（名称・電話番号）
整形外科：（名称・電話番号）
内科：（名称・電話番号）

↓

事故報告書作成・保険対応 担当：

(追加資料)

- ・参加者名簿(緊急連絡先電話番号入り)
- ・活動場所の概略図(携帯電話使用可能エリアを明示)